

あを 5

2015



大宮・氷川神社

甲斐駒ヶ岳



須賀忠男

呼称 かいこまがたけ

標高 2,967m

甲斐駒の巖の深みや秋に入る
甲斐駒を拝んでをりし根深汁
秋光の甲斐駒迫る父の墓
甲斐駒に日は呑みこまる夜の秋
甲斐駒に夕日は入りぬ河鹿笛

小林未由樹
木村 嘉男
芝宮寿万子
東 亜 未
田中 藤穂

あを

五月

出てきさう

佐藤 喜孝

東京

移りつつ藪うぐひすの出てきさう

かしは手ののちの利き耳梅の花

のちぞひののこせし昏のひひかな

春深更試し切りするテレビジョン

原發をもったいないと春の國

春陰の下駄箱に下駄ひとつあり

尾ひれたれ春たけなはの金魚玉



今年の「あを」の扉は須賀敏子さんの夫君、忠男氏の山岳スケッチを以て飾らせて戴いた。わたしの登った山もあるので嬉しい。ひととき絵の中の風に吹かれてゐる。

前に録画しておいた「尾瀬」をみた。音楽とテロップのみの映像。そのテロップが出る前に花の名が出てきたものがいくつかありうれしかった。木道は立派な複線になってゐた。燧や至仏が出てくるとあそこに登ったのだなあと、うっすらとなった記憶を呼びもどす。猩々袴や岩鏡の花の色に目が吸付けられる。あのころ粉末ジュースといふものがあり残雪にかけ渴きを癒したものだ。

少し早いが自動車で高所に行き気を養つてをられた阿部寒林さんの顰みに倣ひたいと思ふやうになつてきた。

猫

齊藤 裕子

東京

夢の怒り鎮まりてゆく石路の花

細りし首ううーんと伸ばし春の風

覚悟して撮した写真春が来た

暗がりの中の輪郭春の猫

ああらあら愛猫がもう恋の猫

まさむねが何とこの度恋猫に

恋猫に夫はいはいと答へをり

☆

佐藤 恭子

東京

冬夕焼波折なおりの色のとめどなく

波ひとつ動きだしたる加留多かな

春近しと言ふに大木横向きじゃ

苦界へとかへつてしまふ恋の猫

美哉あなによし枝垂れ桜をほほにうけ

いにしえも現世もまたさくらかな

柳沢の墓に傾ぎし春の杉

一冊の本を読むにもなかなか時間のかかる質で困る。戴いた句集「一郎つれづれ」を最近少しずつ読み始めた。

堀内 一郎先生とは、清澄庭園涼亭で行われた「あを」十周年記念の時隣の席にご一緒させて戴いたくらいで、あまりお話する機会もなかった。しかし、いつもにこやかなお顔で穏やかに話されていたお姿が印象に残っている。そんな先生が癌の手術を乗り越え、色んなお役を引き受けなおクリーニング店のお仕事もなさり、前向きに頑張っといううつつした事を文集を読んで初めて知った。

まだ慶応病院で定期的に検査が続けている私も、明日がその検査日だ。何かあってもその時はその時なんて言いながらも、検査の前の不安な気持ちはなくなる事はない。

少しずつだが「一郎つれづれ」を行きつ戻りつしながら読んで、病気に負けずにお仕事に句作にと励まれた先生を見習いたいと思うこの頃です。

一軒置いて建っているアパートの蔦が生き生きと茂ってきた。

最初は持ち主が植えたのではないと思うが、家の土台をぐるりと回るように茂ってきた。その蔦は誰も手入れをしなくとも、又引き抜く人もいないので毎年子供が大きくなる様に伸びてきた。住んでいる人はどんなのかなあくと、ふとおもった。

窓は多分開けられない。家の外側なので引き抜くこともできないだろう。隣がくっついて建っているのでも横からも入れない。見ている分にはとても青々として気分が和らぐ。今日蔦に目をやったら、なんと屋根に登っている。来月あたりになると屋根も緑になるのだろう。気持ちのいい景色になってしまふ。何かい俳句の種になればいいのだが。

☆

篠田 純子

東京

蠅生れ徳利の口にとまりけり

笹鳴きのけふ強くある日差しかな

潜るとき鵜の勢ひの姿美し

水上バスの日の丸燃れる涅槃西風

鶯や第七サティアン跡更地

蠶ぐもりランナースハイと擦れちがふ

春埃シュレツダーして退職す

揺々たり

定梶じょう

石川

何の日の東風が翻弄国旗かな

あんたさん何処からお出で二日灸

虫出しの雷金物屋落ちつかず

火事鎮火折から春の月上がり

木瓜まっ赤初心な忘るべからずと

孕み猫人を見る時怨嗟の目

蝶の昼聞こえて胡弓揺々たり

三月の或日の午後、浜離宮の前の信号の所で、若い女性が段ボールに何か貼り付け差し挙げている。「富士まで乗せて」とある。ヒッチハイクですか。と聞くと、そうです。とのこと。昔の事を思い出した。

主人が二十歳、私は二十一歳の三月、早稲田大学の交換留学生三名と日本人四名で、紀伊半島をヒッチハイクした。ハワイの日系三世の、ダイアン、エスタ、黒人のラニは三人とも女性。日本人は女性二人と男性二人。日本語のたどたどしい留学生と、日本人を混ぜグループ別けされた。熊野、橋杭岩、瀬八丁では舟に。潮岬で朝日の昇る所を、皆で感激しつつ見た。十津川のと、京都の宿は留学生達に連れて行かれた。旅の終りには、彼女達は日本語が堪能になっていた。旅のハミリがある。

平成に入ってからだったろう。

参加していた季刊誌に次の句を投句したことがあった。〈啓蟄やおかめいんこを見てわらひ〉。当時ワード・プロセッサーが出版業界にもとり入れられて、変換ミスが面白可笑しく取り上げられることのあった頃だった。商売上決算書等を作る必要があったりしてワープロを使っていたが、文章や投句は全て自筆。中学生だった娘が、ワープロなら悪筆を曝さなくていいのに、等と憎たらしいことを言ったが、現在も自筆だ。

で、その故かどうか、句の「おかめいんこ」が「おかちめんこ」に変わっていた。後の号で訂正されて困ることはなかったが、のちにある方から質問されて、「啓蟄や」を何う鑑賞したら宜しいか、と。これには困った。

春 怒 濤

須賀敏子

埼玉

春怒濤犬吠崎の句碑巡り

海丸く銚子一面春キャベツ

春宵のスカイツリーに夕日果て

スカートの乱れの様に椿咲く

梅の香や映画の余韻消えぬまま

電話では明るく元気草の餅

春なのにこの国じわりじわじわと

春 愁

竹内弘子

埼玉

川風に顫へやまざる流し雛

母の諭しいまこまやかに柿芽吹く

春はやて犬の毛布が木の叉に

キューポラの町のはづれの土堤青む

震度3ほどを春愁とや言はん

花ぐもり河馬の口中もいろいろに

蜷の道なぞりなぞりて川下へ

涼しさの野山にみつる念佛哉

去来

是は善光寺如来の洛陽眞如堂に遷座在し時の吟也。はじめの冠は、ひいやりと置きたり。先師曰、かゝる句は全體おとなしく仕立てるものなり、五文字しかへてよしとて、風薫ると改め給ふ。後猿蓑の撰場には、再び改て、今の冠にぞせさせる。

「去来抄」より

雨の事

春雨はをやみなく、いつまでもふりつゞくやうにする、三月をいふ。二月末よりも用る也。五月を五月雨と云。晴間なきやうに云もの也。六月夕立、七月にもかゝるべし。九月露時雨也。十月時雨、其後を雪みぞれなどといひ來る也。急雨は三四月七八月の間に有こゝろへ也。

「三冊子」より

火焰土器

田中藤穂

東京

会釈してマスクの人の眼が笑ふ

火焰土器今日は東京大空襲

西郷像顔に春の日ゆらゆらと

春の雲お化け煙突あの辺り

どの寺の春の鐘の音にしんそば

咲きみちて杏もの憂き夕曇

ムール貝食べに銀座に春の月

菠薐草

長崎桂子

三重

土まどふ露地物うれし菠薐草

茹で上り鉢にちんまり菠薐草

春一番巻添へすこし通り直ぐ

荒ぶ風天空綺麗二月尽

鶯餅萌す話を賑やかに

生菓子にロシヤン・ティしてうらけし

花並木ゆるり行く人走る人

三月に吟行する尾久の原公園は、主人と松本米子さんが入院していた病院から病院への道筋にあったので私はよくその前を通った。主人は十月初めに亡くなり、その後米子さんを見舞って「ご主人は？」と訊かれると、「うーん、横這い」などごまかしていた。米子さんの脳腫瘍は出来た場所が悪くてとうとう回復せず十二月末に亡くなった。

藤野寿子さんのご主人が介護が必要になられた頃よく車椅子に乗せて尾久の原公園へ行つたと仰しやっていた。私は哀しい思い出の重なる所でまだ中に入った事はない。

原っぱの様な公園だと門から見えていたけれど今頃は桜が咲いているとうかがって、どんな花に巡り合えるかと楽しみにしています。

二月中旬から三月初旬にかけて、よく電話が掛かる。受話器を取る前に、現在の世相を考えて、つい、一つ大きく呼吸し構えてしまう。

その電話の殆どは「私の作品の展示を見に来て下さい」で、日頃ほんに軽く会釈するだけなのに、何故か電話番号まで御存じで、何故か、登録はしていないのに不思議です。先輩からの電話は、主題から逸れた話になり長い時間を費やし、終つてとても疲労を感じました。

それにしても、雨風は強く、花粉も多くなり、外出は億劫になつてきて、お断りする事が多くなりました。

番屋

森

理和

東京

赤に桃斑の咲きし椿かな

海面にしぶき走らせ春疾風

野良猫の二匹連れ立ち水温む

早咲きの花蠢かす鳥の数

初産みの桃色淡く寒卵

春の海大きくなりし鳶の輪

菜の花や番屋で作る伊豆の塩

☆

山莊慶子

埼玉

折雛の一对並び留守の家

雛祭独りの寿司をつくりけり

桃園や一輪ごとに歩を向けて

草原は初蝶を添へ景となり

眞赤なる椿に倦きる日差しかな

草若葉犬の歩みの弾みゐて

聖壇に白百合溢る復活祭

易簡而天下之理得矣。

易経繫辭上傳

簡潔は智慧の妙諦なり。

シェークスピア―ハムレットⅡ

冗長になることは、いつでも容易であるが、簡潔にするには容易ならぬ努力が要る。圧縮し要約しそして最後はきりつと緊めることである。

E・アラン

百朝集（安岡正篤）より

1 霧晴れあがる妙高の

山頂^{いただき}はるかのぼる陽に

輝くいらか仰ぎつゝ

若きわれらが健やかに

集いて立てる庭広し

あゝ我が山東^{さんとう}力あれ

2 丹波小富士^{さんとう}の影さえて

流れも清き由良川の

たゆまぬ歩み重ねつゝ

若きわれらの行くところ

真理の扉今開く

あゝ我が山東のぞみあれ

兵庫県丹波市市島町立山東中学校歌

戦時中、丹波の小学校に通っていましたが残念ながら校歌の記憶がないのです。戦後新制中学ができ校歌ができました。

☆

赤座典子

東京

のどかさど無縁なるまま四年過ぐ

野遊や子はいやいやと先づは言ふ

家猫の縄張狭し遅日かな

街灯のほつほつてんてん春の宵

ごろごろと根っこ載せてる春の土

ただいまと幼子坐る花筵

旅間近春大根をもてあます

春に遊ぶ

秋川

泉

埼玉

花ふぶく田安門より人の波

花曇群れるボートのとりどりに

すいすいとアメンボの棲む泉川

母を待ち春の筍掘り出して

山里を尋ねし婆の一輪草

易簡而天下之理得矣。

易経繫辭上傳

簡潔は智慧の妙諦なり。

シェークスピア―ハムレットⅡ

冗長になることは、いつでも容易であるが、簡潔にするには容易ならぬ努力が要る。圧縮し要約しそして最後はきりつと緊めることである。

E・アラン

百朝集（安岡正篤）より

九年前の寒い二月、外猫はやって来た。昼夜を問わずミャーミャーと泣き続け、とうく堪え切れず餌を与えたのが始まりとなり、以来我家の庭猫となった。野生猫のまゝ人には決して体を触れさせず、餌を与えても、シャーシャーと顔と体中で威嚇した。そのうちミャーミャーと人について廻り、餌をねだる様になった。猫のボランティアの方の協力の元、ボランティアの獣医にて避妊手術をした。治療后、檻から出したら一目散に消えたが、数日で庭に戻り、家猫（オス）の居るドアの網越しに恋しそうにやって来る。この庭猫は気が弱く、ノラ猫の『朝青龍』に怯え、住まいの縁の下を盗られ、餌を盗られた。気弱な庭猫の可愛さに、こちらは、『朝青龍』と戦った。

水辺にて

井上石動

山梨

爪に星のせて完璧はるゆふべ

遠眼鏡三百円の町霞み

暮れ方の雨は細しや沈丁花

月に暈遺し春雨あがりけり

口開けて黙の埴輪や春の昼

蜷汁国来国来と煮立ちけり

長閑しや恋のボートはふらついて

☆

王

岩

愛知

名古屋平和公園

墓は傍花見たけなは浮世かな

花散るや愛を囁く朱唇いずこ

日は暮れて道なほ遠し花曇

黄心樹の花咲く庭や奥ゆかし

犬山城に登る 三句

見下ろして木曾川光る春日影

春の江を眼下に見るや白帝城

俯して見る筏は速し春の川

泣いてたまるか

新聞の全面広告に度々登場しているのが、このビデオ。渥美清主演、昭和40年代初ころTBSで放映され、当時高校生の私も幾話かは見た筈のドラマ。高価ゆえ、我慢していたそれが、BS12で3月から放映された。脚本・監督・出演者も今考えると半端ではない陣容。あの時代の、町・生活・人情、が画面に現れる。そしてイチバン驚くのが、会話のゆつたりさ、と、夫婦の会話の丁寧さ。小津映画でも感じるのだが、ほんの少し前の日本人は、丁寧なおだやかな・ゆつたりとした喋りをしていたのだ。それがいつしか早喋りとなり、品が悪くなり。落語「長短」の長の人の喋りでは、ちと困るが、もつとゆつたり喋るべきでは・・と。「××（注：妻の名）さん、気を付けて出かけて下さいね。」ぐらいを履行せねば・・などと考え始めてはいるが「出来るわきゃーあねえか!」と、すぐ馬脚現わす私で、ありにけり。

4月12日、御年は80歳を超えられ、詩吟を数十年も嗜まれた友人に誘われて、犬山市へ行った。名鉄犬山ホテルで、岐阜可児市在住の俳人岬雪夫氏を引き合わせていただいた。85歳になられた俳人は自ら乗用車を運転し、可児市の自宅から来られて、こちらを驚かせた。近頃、50を少し超えた僕はやかもすれば「半百之年（50の年）」を嘆きがちになるが、80を超えられたお二人の前向きなお姿から多くのものを学びました。岬雪夫氏の奢りでホテルのレストランで美味しい料理を食べながら、三人は楽しく話した。

その後、詩吟の友人のご招待で国宝の犬山城に初めて登った。天気にも恵まれて天守から見た景色は実に壮観だった。蕪村の句「帰る雁有楽の筆の余りかな」で知った有楽の如庵（国宝）も見学した。一日で国宝を二つ体験して贅沢な時間を過ごした。

春だから

大日向幸江

埼玉

パンジーやパステルカラーの園児帽

足しげく通ふ信濃路桃の里

塗り立のペンキキラキラ風光る

洗顔水手よりあふるる春佳き日

竹林に入りて野三ツ葉芳しく

長生きの呪文のやうに野遊びす

空一杯星の数ほど苺食ぶ

四月作品より

令法の芽紙のうすさに水流れ

佐藤 喜孝

令法（りようぶ）という植物をこの句で初めて知りました。見た事があるのか、ないのかも定かではありませんでした。しかしこの句を読むと、川辺に芽吹き始めた令法の芽の柔らかい緑と、石の上を滑るように流れていく水の様子が生き生きと目に浮かんできました。山の中を流れる小川を想像しました。「紙のうすさに水流れ」が溜息が出る程魅力的な表現だと思いました。年月を経て角のとれた石の表面を、綺麗な水が流れていく。よく見ると、水面からとび出したように見える石の表面をも、水は滑るように流れている。まさに紙ほどのうすさで流れているのです。水の流れの速さやせせらぎの音

小中と丹沢が近くに聳える町で

過した。校歌はやはりその場所にある丹沢山が柱になっていた。私の兄弟達も同じ中学だったが、校歌はよく覚えていない。二宮金次郎と桜の大樹があつた小学校入学の日は桜の樹の下で大泣きをした。中学は少し小高い丘の上にあつた。盆地の町並が良く見渡せた。そして丹沢山と良くニラメッコをした。テニスコートで白球を追ひ、ときどき買い食をした。私の中で、白い色が中学の印象だ。白球・白服の夏の制服、白色のアイスクャンデー、白いソックス、これは多分一生の心の宝物だろう。

斉藤裕子・佐藤喜孝

まで伝わってくるように感じました。（裕子）

つくしん坊青い空へと大欠伸

大日向幸江

つくしん坊と聞くだけで春の訪れを感じて楽しくなります。川堤でしょうか、野原でしょうか？日当りの良いそんな場所で見つけたつくしん坊。「青い空へと大欠伸」しているのは、つくしん坊を見ている作者でもあり、春の光を感じて地中から顔を出し、まっすぐに伸びてきたつくしん坊のようでもあります。とても楽しく気持ちの良い句だと思いました。（裕子）

伸びしたまま寝入りし猫よ春隣

斉藤 裕子

をさな子は食事をしながら寝てしまふことがある。「春着の子笑顔のままに寝入たる 小西

和子」は幸せ満開である。

裕子さんは近頃猫の子を世話する機会に恵まれたやうだ。有りあまる愛情のはけ口が見つかったかのやうに嬉々として猫の句を量産してゐる。裕子さんの膝下で安心しきった猫の寝姿が「伸びをしたまま」とほほゑましく表現してゐる。「耳欹てまじろむ猫や春隣」も然り。(喜孝)

聞耳を立ててをるなり竈猫 柴田佐知子

電燈のやさしきひかり古ひいな 篠田純子

作者が訪れた古民家園に飾つてあつたのでしようか。明る過ぎる蛍光灯の光ではなく、昔の裸電球のような「やさしきひかり」のもとで見ること、古い雛人形の柔らかな顔立ちや、今はもう色褪せてしまった装束が、より一層趣を増してくるよう感じられます。何代にも渡り、受け継がれ大切に飾られてきた古い雛人形

に対する人々の思いや、今その人形を見ている作者のやさしい心持ちが、「電燈のやさしきひかり」という上五中七に込められているように感じました。(裕子)

神棚のおふだの白き建国日 定梶じょう

年が明けいたってきたお札が神棚に祀られてある。紀元節の日にお札の白さがなぜか気になるのである。紀元節は明治五年に制定され昭和二十三年占領軍により廃止。曲折を経て昭和四十一年に建国記念の日と名称を変へ復活した。複雑な思ひのある建国記念の日。さらさらと詠まれてゐるが作者共々なにかこころに引っかかる休日であり、そして俳句です。

停留所永く待たされ妻芽ぶく 定梶じょう

わたしもバスの時刻表のあてにならないこと

を日頃体験してゐる。ある時は北海道のジャガイモ畑の前で二時間ほど待たされた。じょうさんもこの時長くではなく、永く待たされたのでせう。だうも停留所の辺りに麦畑があつたやうです。その畑の麦は芽をふいています。あたかも待たされてゐる間に芽が出てきたやうに読みました。諧味溢れた一句です。かやうに怒りや不満を解消または軽減できるのは流石。をかく読みました。(喜孝)

伊予蜜柑届けば夫の顔緩む 須賀敏子

送りものが届くと、届けられた品物だけでなく、送ってくれた人の気持ちも届けられたやうで嬉しいものです。それが故郷の特産品だったりすると尚更です。須賀さんのご主人の故郷は愛媛なのでしょうか？届いた荷物が懐かしい故郷の伊予蜜柑だった。言葉には出さないが、

ご主人が嬉しそうな顔をしたのが作者にはよく分かった。「顔緩む」という控えめな表現が、ご主人の押さえきれない気持ち溢れ出てくる様子を上手く表していると思いました。届いたお蜜柑を剥きながら、故郷の思い出話に一頻り花が咲いた事でしょう。(裕子)

母看取らざりし日に似て風花す 竹内弘子

母看取りし日ではなく、「看取らざりし日」という句にはっとさせられる。作者はお母様がお亡くなりになるその時に立ち会うことができなかつた。その日は風花の舞う日だった。作者は風花が舞うと、どうしてもお母様の亡くなつた日を思い出してしまうのでしょう。大切な母親を失った深い悲しみと、看取る事ができなかったという切ない思いが、晴天にちらつく雪の儚さと一緒にあって、読む者の心に沁み透つ

てくる句でした。(裕子)

詩集予約店を出づれば雪の舞ふ

田中 藤穂

藤穂さんの句を読むと、毎日を丁寧に心豊かに過ごしていらっしゃる方の句だなあと感じます。どうしても読んでみたいと言う詩集があつて、寒い日なのにわざわざ本屋さんに予約に出かけた。予約し満足してお店を出たら、外は雪が舞っていた。詩集の届くのを想像し、わくわくしながら帰る少女のような心。本屋を出た所に雪が舞う、その情景を想像しても美しい。「雪の舞ふ」が「詩集予約」に相応しい、情趣あふれる句だと思いました。(裕子)

種袋マンガ本のごと積み重ねをり

長崎 桂子

マンガ本はみかけるが、種袋は印象に薄い。季節になると色とりどりの花の種が並ぶ。袋に

は極彩色で花の姿が印刷されてゐるのだらう。その積み重ねた様子が大きさはともかくマンガ本のやうに見えた。花の種を選ぶ楽しさの伝はる句。

(喜孝)

春の園ストレッチする団子売

赤座 典子

典子さんの観察は動植物はもちろんだが人間に特にその力を発揮する。といふより人間が好きなのであらう。この句は団子などを売っている人をしばらく見てゐて生れた句。客足が途絶え、手持ち無沙汰になった店員さんが、売場を離れ体操をはじめた。体操など古めかしい云ひ方ではなくストレッチと。こんなことも俳句のなかではおもしろ味の増すことである。(喜孝)

軽く噛む眼鏡のツルや雛用意

井上 石動

“老眼鏡”といふ呼び方の別名はないのだからか。それはともかく老眼鏡とはやつかいな代物。手元の作業をする時にはこの眼鏡をかける。さうすると周りがぼんやりとして焦点が結ばない。といふことで目から少し離れて作業をする時は眼鏡を外す。掛けたり外したりする内に置いたところが解らなくなったり、掛けてゐる眼鏡を探すハメになる。しかたないので眼鏡を外した時紛れないやう、すぐ使へるやうに咥えることになる。「軽く噛む眼鏡のツル」である。中七のやで古風に仕上げてゐる。(喜孝)

美しき小雨の色や嬌柳

王 岩

嬌柳はタオヤナギまたはタワヤナギ・タオヤギと読む。「鶯を魂にねぶるか嬌柳 芭蕉」の句があるが例句の極めて少ない季語。「嬌柳朧黒髪」など歌舞伎の外題にはよく使はれてゐるや

野菜畠ぬけて彼方へ梅雨の蝶

山莊 慶子

蝶の動きの遠退いていく感じがおもしろい。春の頃なら野菜畑も花盛りであつたらうが、梅雨の頃ともなれば葉が青々と繁茂してゐるのだらう。蝶は畠を見向きもせず彼方へ飛び去った。しかしこのやうに意味付けなどせず読むとおもしろい。(喜孝)

針の孔くぐると膝下春の風	佐藤喜孝
川べりの小さき炎野焼せり	大日向幸江
伸びしたまま寝入りし猫よ春隣	斉藤裕子
仄暮れし微かにながる香は水仙	佐藤恭子
電燈のやさしきひかり古ひいな	篠田純子
停留所永く待たされ麦芽ぶく	定梶じょう
富士きりり十国峠春立てり	須賀敏子
春寒や箸に辿れる被災地図	竹内弘子
詩集予約店を出づれば雪の舞ふ	田中藤穂



種袋マンガ本のごと積まれをり	長崎桂子
生垣のわさわさ揺るる北風	森理和
剪り過ぎと嘆きをりしに冬芽つく	山莊慶子
春の園ストレッチする団子売	赤座典子
葦の沼力たくはへ鴨眠る	秋川泉
軽く噛む眼鏡のツルや雛用意	井上石動
美しき小雨の色や嬌柳	王岩
野菜畠ぬけて彼方へ梅雨の蝶	山莊慶子



ホトトギス 四月号
米粒に転がつて来し雀の子 稲畑廣太郎
桜貝拾へば消ゆる波の音 稲畑 汀子
沖 四月号
春愁の手で触れてみるゆるぎ石 能村 研三
鴨 四月号
留守の家に留守のこゑする春の暮 井上 信子
師も我もただ若かりし春の雪 々
つつしみて受く縄跳の子の御慶 高橋 道子
京鹿子 四月号
雪しざる音にまたして暮れ急ぐ 豊田 都峰
万象 四月号
竹林を貫く寒の入り日かな 大坪 景章
末黒野 四月号
まじろみは天与の甘露日向ぼこ 小川 玉泉
若水を桶に溢れさす匂ふまで 松本三千夫
朝 四月号
春菜摘むたのしさに顔あげもせず 岡本 眸
わが立つる音みな遠き彼岸かな 々
雨月 四月号
蹲る鳩も春待つ一つかな 大橋 眺
萱 四月号
風花やけぶりのやうにけふも暮れ 木村 嘉男
本当のことはともかく亀鳴けり 亀田虎童子



啓蟄や家の囲りに砂利敷きて 小島 良子
絶好の散髪日和多喜二の忌 松下 道臣
雲の峰 五月号
日に戯へ風に戯へて桜散る 朝妻 力
船団 一〇四号
君寄りの気分柿などころがして 坪内 稔典
この世は秋先程までは母も在し 池田 澄子
年寄り増えたそれがどうした冬うらら 長谷川 博
WEP俳句通信 八五号
山枯れて言葉のごとく水動く 飯田 龍太
手が見えて父が落葉の山歩く 々
大根抜くときのちからを夢の中 々
夕ぐれの羊歯のかげより老のこゑ 々
遊ぶ子とお使ひの子と秋の暮 鷹羽 狩行
火星 五月号
かき揚げの土筆に忌を払ひけり 山尾 玉藻
無口なる少年を入れ春日傘 々
正直に齢をかさね枇杷の花 野澤 あき
つくばひに椿置きゆく竹箒 坂口英佐子
金玉羹
出水歩き弾み心の無くもなく 宇都宮敦子
蟪蛄の腹引きずれる風の中 々
古毛布かぶせ骨董市の銃 々
投げし萱ほどけつつ行く冬の川 々

佐藤喜孝

俳境流連

新緑の濃淡に間のありにけり

桂 子

(二〇〇三年六月)

お芝居、音楽会、講演など終ってから心地よい疲れを感じた時、調和していて間の取り方がお上手だったなと思います。日常生活でも友人や隣人との関係に、間の取り方を必要として暮らしている気がします。

住まいの近くの三メートル程の小さな川の両岸は桜の並木です。桜が散り始め二三日で所所に散り残った一輪や、花卉の二枚や一枚の花の淡い桃色と萼の臙脂色に、芽吹いて間も無い若緑の葉の織り成す色彩の並木が、一キロメートル余り続きます。そして一週間もすれば、芽吹いた葉はやや濃く大きくなり次々と後ろから芽吹く葉は淡くて柔らかい。午

後に散歩をすれば、かなり茂っている葉の木漏れ日は、その日によつての屈折の仕様で、得も言われぬ色合を添えて、更なる調和の美しさを、醸し出してくれます。

此の近くにある環境に深く感謝し、此の並木を時時四十分か一時間ほどゆっくり歩き、心の栄養に頂戴して居ります。

菜種梅雨買ひ足す三寸の和蠟燭

幸 江

(一九九六年五月)

蠟燭をローソクと書き始めたのは、何時頃だったか記憶には無い。

クリスマス・誰かの誕生日に蠟燭はいつも主役だったし、多分これからもそうだと思う。西洋の文化に満たされたこの時代、もう蠟燭なんて書いていられない。ローソクで御祝事が始まりと美味な料理を食べる。

こんな理由のないローソクは使い捨てだ。三寸の和蠟燭は私にとつては、優雅で美しく簡単に火など付けられない。蠟燭を買い足すつて自分で火を付けたから数が不足している事だね。それこそ、そんな勿体無いことを何でしたのか。菜種梅雨の長すぎる今、重箱の中に入れた宝物を大事がるのです。

螢籠深夜の余震揺りてけり じょう

(二〇〇七年九月)

能登半島地震が起きたのは、この句を作った年の三月下旬。佐藤さんからも見舞いの電話を頂いて、むしろ申しわけない、と思ったことでした。

そんな年の五月でしたらう。ごく親しくしている知人の娘さんがふたり目の赤ちゃんを出産することになって。で、最初の子を知人が預かることになったのでした。

手がかかってしょうがないよ、なんぞと言いな

り行くと、懐かしく心豊かになります。

平成十七年の九月の半ば過ぎこの線に乗りその途中の駅で下車して一時間余歩き峡谷へと近付いて行った、この日はまだまだ昼下りの日差しはきつく、三メートル程の幅の川の流れは、水嵩も多く音は高く、蝸も沢山居るらしく、とても騒々しく喧しい感じでした。今まで蝸の鳴く季節には、残暑も可成りおさまり夕暮時に聞く事が多くて、時の移り行くやや淋しさを感じて居りましたが、今日の山峡は、人出は多く川の音、蝸の鳴声がからまって騒音に近く、残暑はともきつく、峡谷の心地よさは少しも感じる事も出来ず、せっかく養老線に足を伸ばしたのに、却って疲れた一日でした。

葉鶏頭本気出したら捕まった 裕子

(二〇一三年十一月)

平成二十五年、主人の名古屋赴任から続いた大変

ら、私が訪うた時には嬉しそうにその二歳の子を世話していたのでした。

そしてやがて螢の季節。虫籠や螢かごはホーム・センターで売っているようですが、友人は納屋から、彼が子供の昔使った鳥かごを探しだしてきた。スパーマーケットの青果部で調達したという玉葱のネットで鳥かごを包んで螢かごの出来上がり。その螢を孫娘は大変喜んだ、という。

さて、そこまでは事実を句にしたのですが、「深夜の余震」は想像、捏造。但し、昼夜にかかわらず随分大きな余震が続いたのは事実ではありました。

せせらぎと蝸もつれ峡の村 桂子

(二〇〇五年十一月)

三重県の桑名から、岐阜県の大垣までを走る電車を養老線と言い沿線にはまだまだ多くの田畑やみかん畑が残る田園風景を、各駅停車に揺られてゆつく

な時期をどうにか乗り越え、やっと穏やかな気持ちを取り戻し、さあこれからは色んな事を楽しんでやるぞと思っていた。七月には実家に帰り、年とつてきた母を弟だけに任せつきりにせず、ちよくちよく帰って力になろうと思つて東京に戻った。今までの自分を反省し、全ての事に本気を出して頑張ろうと心に決めていた。そんな矢先の事、東京に帰つて来て受けた検診で卵巣癌が見つかった。

人生とはそういうものかも知れない。鹿児島に帰った時、いつも通る坂の途中の植込みに、背丈の高い葉鶏頭が、透き通るようなオレンジと燃えるような赤い色で力強く立っていた。以前にもそこで見た事があったのだが、私には葉鶏頭がまるで命を燃やしている様に感じられた。その後も命の事を思うと、なぜかこの葉鶏頭の燃えるような色がいつも浮かんでくる。手術から一年半、私の命もまだ燃え続けている。

山茶花や東司の窓の薄日いろ

恭子

(二〇〇七年二月)

吟行行くと家にばかり閉じこもっている生活をしている私にとって何か心がかろやかになるとか、一日の決まった時間に決まった行動が壊れるのでなぜか肩の力が少しばかり軽くなる。ベンチに座っているお年寄りの側で膝に前足を乗せて、全身を預けて寝ている猫の姿を見ると、いいなあ。安心して身を預けて寝ている姿は！とても平和な？日本が誇らしくおもってしまう。我が家に置いてきた猫のアリちゃんが脳裏に浮かぶ。二階から下りてきて一階の仕事場の座布団の上で、いつの頃からか誰かが帰ってくるのを待っている。帰ると安心してか、一緒に二階に上がってくる。もうかれこれ野良から我が家の猫として十年もたった。もうそろそろ私の右手を枕の睡眠は終わるだろう。温くなり布団の中でなくとも寒くないので。

ターも家の壁を温めてくれた。ストーブもヒーターもまだ有る、でもそれを使ってくれる人間が居ないのだ。三月の初旬まだ寒い。

大きな溜息がどこからか聞こえてくる、住む人のいない家かららしい。哀しくって哀しくって思わず溜息が出て来たのだ。

梅一枝届けて雛に呼ばれけり

裕子

(二〇一一年五月)

庭の紅梅が咲き始めると、寒い中にも待ちわびた春の到来を告げてくれるようで毎年嬉しくなる。良い匂いのする花は色々あるが、中でも私は梅の香りが一番好きかもしれない。部屋に一枝飾るだけで何ともいえない良い香りがたちこめる。「桜切る馬鹿、梅切らぬ馬鹿」と言うが、その言葉を信じて、梅が咲くと樹の枝振りを考えながら高枝鋏で枝を切り、我家だけでは勿体ないとご近所の方々に差し上げて

吟行に行ったときお寺のトイレをお借りした。窓は磨りガラスであった。日の光もやわらかくなって、とても気持ちよく窓そばに咲いていた山茶花の赤がことの外澄み切って見えた。

何時何処でも穏やかな心持でいられたらと、最近特に思うことである。昨晚も私の右手は、枕だった。規則正しい寝息を立てて熟睡のアリでした。

無人なる家の吐き出す余寒かな

幸江

(二〇一四年四月)

こんな恐い句をどうして作ったのか物理的に家が寒気を吐き出すなんて有り得ない。でも日本中で住む人の居ない家が数知れずにある。

人が寒いと思っている時、無人の家も寒いのだ。人間が居て、おしゃべりをする声が機嫌よく聞こえた時が家にとって幸せだったのだ。

冬は特に人恋しい、暖気を吐き出すストーブ、ヒ―

いる。平成二十三年、届けた先の奥様が喜んで下さって、「丁度孫のお雛様を飾ってあるから、そこに飾りましょう。どうぞ見ていって下さい。」と誘って下さった。我家は三人皆男の子だったので、玄関に小さなお雛様を飾るくらいで、ちゃんとした雛飾りにはほとんど縁がなかった。梅の花を一枝届けただけに、立派な雛飾りを見せて戴き、お茶まで御馳走になってしまいました。今年もこの紅梅は沢山の花をつけ、私の近所付合いに一役買ってくれました。



あを吟行会

川崎市立 日本民家園

(2015年2月28日)

春めくや土と近しき古民家 大佳
 黒釜戸油屋の土間凍返る 吉保
 電燈のやさしきひかり古ひいな 純子
 手斧目の残る柱に春日差 典子
 二月盡三和土抜けると八重葎 喜孝

あをキーワード俳句辞典(けつーこ)

血液

まっすぐに血液すすむ九月かな

篠田 純子

血縁

血縁のうとましき日や桐の花

竹内 弘子

蹴蹟く

青嵐子を迫ふ足の蹴蹟く

佐藤 恭子

欠落

薦紅葉記憶ほろほろ欠落す

田中 藤穂

欠落の頁を惜しむ蟬しぐれ

々

結露

温室の結露の窓の眠さかな

篠田 純子

結論

結論のどっちつかずに秋の夜

鎌倉喜久恵

ケトル

午後三時ピーピーケトル梅雨畳

篠田 純子

雪はげし朝のケトルが鳴りつづけ

鈴木多枝子

子

子に逢はむ千歳空港着ぶくれて
 子の帰り待つ夜静かに雪積もる
 子が摘みし土筆十指に収まらず
 冬晴やコロコロ駆けける下校の子
 シャボン玉無心に吹ける父と子と
 公園を仕切る子のあり揚雲雀
 親と子の影ふみごっこ松の内
 子を持たぬ娘と旅で見る植田かな
 鳳仙花うそうそどきの子の名呼ぶ
 ででむしの子にし右巻殻のうづ
 嫁ぐ子のやさしくなりぬ実紫

仔

田搔牛仔は親のそば離れずに
 月毛の仔春の岬の上に立ち

嬰

抱きし嬰の温み夕空雁帰る
 長泣きの嬰の寝入りしや虫すだく

後藤 志づ
 須賀 敏子
 栢森 定男
 芝宮須磨子
 内藤 悦子
 江倉 京子
 吉成美代子
 赤座 典子
 佐藤 喜孝
 定梶じょう
 井上 石動
 赤座 典子
 大日向幸江
 渡邊 友七
 須賀 敏子

古都へ

佐藤喜孝

初風をひとつ抱へし富士の山

ひと跨ぎ大佛殿の春の闇

舊き石麝香あぶらのはるのあめ

ほふりゆう寺かはらぬものに秋の風

鐘の音をふたつも秋の法隆寺

朝霧にまた立ちあがる舊き塔

一煙のむすぶ田面と冬の天

風花のころがる三十三間堂

さあかすに風花にあふ旅先で

毎月25日発売
定価1200円(税込)

月刊

俳句界

2015年6月号

対談

田中康夫

(作家・元長野県知事)

魅惑の俳人

鈴木鷹夫

私の二冊

島村正「宇宙」

●お邪魔します

書齋訪問

能村研三「沖」

※セレクトシヨン結社

「雉」田島和生

発掘！わが郷土の俳人③

中部編(愛知・三重・岐阜・静岡)

21句

戸恒東人 水田むつみ 稲田眸子

地元俳人大アンケート！

分ラビエ

俳句界NOW

三村純也

〇芭蕉一門相関図

〇有力弟子と人として

〇芭蕉と弟子達 大輪靖宏

〇芭蕉一門とその時代 井上泰至

〇芭蕉没後の弟子の動向 復本一郎

〇芭蕉と其角 北村純一

芭蕉一門とその後

〇芭蕉一門相関図

〇有力弟子と人として

〇芭蕉と弟子達 大輪靖宏

〇芭蕉一門とその時代 井上泰至

〇芭蕉没後の弟子の動向 復本一郎

〇芭蕉と其角 北村純一

別冊 投稿俳句界

一流選者29名！

日本一充実の投句欄

※一部変更の可能性あります。

お求めは…●〒169-0075 東京都新宿区高田馬場2-1-2田島ビル8F

株式会社 文学の森

TEL.03-5292-9188 URL http://www.bungak.com

発行日

五月八日

発行所

東京都中野区中央2・50・3

電話

090・9828・4244

ファックス

03・3371・4623

印刷・製本・レイアウト

竹僊房

カット／須賀忠男・松村美智子・テイリ エイマ

表紙・佐藤喜孝

会費

一〇〇〇〇円(送料共)／一年

郵便振替

00130・655526(あを発行所)

乱丁・落丁お取替えます。

あとがき
 「俳句界」の広告は版下を送って頂けるのであり
 がたい。五月号の「全国の秀句コレクション」に大
 きな活字で「鮭の酢に噎せて母似の咳こぼす 弘子」
 とあり、裕子さんの名鑑賞文が掲載されてゐる。と
 きをり斯様に「あを」俳句が採りあげられることが
 ある。期待してゐないので驚きうれしくなる。
 ネットで「あを」はよく見られてゐる。見られては
 ゐるが、読まれてゐるかは不明。反響があればよい
 のだが……。 (喜孝)